

ただいま
募集中!

JICA 国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト

募集期間:6月7日(日)~9月11日(金)

2020年度募集テーマ

世界とつながる自分
— 私たちが考えること、できること —

2020年度も上記のテーマで、中学生、高校生からエッセイを募集します。自分と世界との接点を身近なところから発見し、世界とのつながりを考え、感じたこと、行動したことをエッセイにしてください!

エッセイコンテストのPOINT

● 応募は2種類

コンテストは学校応募と個人応募の2種類があります。学校での取り組みがなくても応募できます。



尾木直樹さん

● 著名な審査員

審査には教育評論家の「尾木ママ」こと尾木直樹氏(中学生の部)、女優でエッセイストの星野知子氏(高校生の部)があたります。



星野知子さん

● 優秀者には海外研修の副賞

個人部門での最優秀賞と優秀賞の受賞者には、副賞として約1週間の海外研修があります。自分の目で途上国の「今」を見るまたとない機会です。



途上国の現実を知る
機会となる。

● 道徳の教科書にも採用

過去の受賞作品が中学校の道徳の教科書に掲載されました。エッセイを書く過程で、問題解決的・探求的な学習経験をし、社会や世界の現状を「ジブンゴト」としてとらえたことがわかる内容が評価されたと考えられます。



道徳の教科書に
採用されたのは、
2012年度中学生
の部で優秀賞を
受賞した作品。

応募は
こちらから



生徒たちの
励みになります



学校賞の賞状とメダル。賞状は、掲示板に飾られている。

2年生では各担任が朝の10分間を活用し、数回にわたり国際協力や国際関係についての授業を実施した。学年の担任全員で、事前にJICAのウェブサイトにある教材や過去のエッセイコンテストの作品を共有し、それぞれに授業を組み立てた。「生徒たちは自分の周囲の表面的なことしか知りません。エッセイコンテストでもっと視野を広くできるのではと期待しました」と、同じく担任だった柴田悠さんは語る。さらに、JICAの草の根事業を通してブラジルで教育分野の協力を行っていた校長の鎌田さんも授業を実施。自らの経験と、国際協力を通して感じたこ

とを生徒たちに語りかけた。こうした準備を経て2年生の夏、生徒たちは教室でエッセイを執筆した。「すべてのクラスがしーんと静まり、真剣な姿に驚きました」と先生たちはふり返る。書き終えたエッセイはすべて応募し、初挑戦ながら「学校賞」を受賞した。現在の校長、山崎正義さんは昨年のエッセイをすべて読み、一人ひとりが「よりよい世界の未来を目指して」というテーマについて、自分に引きつけて考えることができていると感じた。「親や友人が外

世界について 考える力を醸成

世界につながる教室⑪ “書く”ことを通して世界を学ぶ JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

50年近く前から開催されてきた「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」には、学校単位でも多くの応募が寄せられる。2年生の全員応募を目標にした、埼玉県立宮代高等学校での取り組みについてうかがった。



2019年度に応募した生徒たちのエッセイ。一人ひとりが「ジブンゴト」として、世界について考えた。



当時の校長、鎌田さんは、学年全員に向けた授業を行った。

生徒たちの“考える力”が
確実に伸びています



右から校長の山崎さん、教諭の橋本さん、藤原さん、柴田さん。



授業の最後には生徒たちからの質問もあり、エッセイコンテストへの意気込みが感じられた。

1年生からしっかり準備

国際社会の中で自分たちや日本ができることを考える機会を提供してきた「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」。コンテストへの応募に全校で、あるいは学年単位で取り組む学校も多い。

2019年、埼玉県立宮代高等学校では2年生約200人がコンテストに応募した。「準備を始めたのは1年生のときでした」と学年主任の橋本恵さんは言う。「当時の鎌田勝之校長から勧められたのがきっかけでした。ただ、生徒たちはこれまで国際協力や世界の課題について学ぶ機会があまりなかったもので、しっかりと準備をして、翌年の全員応募を目標にしました」。

1年生のときには、JICAの国際協力出前講座*1を活用。JICA海外協力隊の経験者による講演には、途上国の実情や国際協力についての基礎知識のほか、活動した国での体験や感じたことなどが織り込まれていた。1年生を受け持っていた藤原隆大さんは「生徒たちが興味を持てるのか不安もありましたが、みんな真剣に聞いていました。知らないことがたくさんあった、考え方が変わったという感想を述べる生徒もいました」と出前講座の効果を実感している。

国籍の生徒は、自分の身近にある外国とのつながりにあらためて気づいていました。おしゃべりが好きな生徒は洋服がベトナムや中国で作られていることに、音楽が好きなのは韓国の音楽を聴いていることに気づく。なにげない日常生活に外国との関わりがあることを再発見し、だからこそ途上国の課題に対してなにができるのか、しっかりと考えていました」。

宮代高校では、今年も2年生がエッセイコンテストに応募する予定だ。すでに1年生のときに出前講座でJICAや協力隊の活動に触れてきた。また、フェアトレードについて学ぶ單元があった英語と家庭科では、同じ時期に授業を行うことで、より理解を深めることができている。

現在の2年生を指導する柴田さんは、エッセイを通して「考える力」が伸びていると感じている。「日本が働く外国人の賃金が低いことや外国人への差別など、日本に住んでいても世界について考えることができることに生徒たちは気づいたようです。今後は書く力をつけて、コンテストに臨みたいと思います」。新型コロナウイルスの影響で思うように準備ができなかったというが、これまでの積み重ねを糧に生徒たちがどんなエッセイを完成させるのか楽しみだ。

*2 60作品以上の応募、または全校生徒の3割以上の応募があった学校に授与される賞。

*1 学校の授業や講演会などに、JICAが国際協力の現場を知る人材を派遣し、途上国の現状や国際協力の必要性を理解する機会を提供している。